

エコ先進国スウェーデンの環境政策・環境教育のあり方を知る

エコ先進国として、環境問題への取り組みを推進しているスウェーデン。私たちは同国の環境政策や環境教育から何を学ぶことができるのか、スウェーデン大使館 ステファン・ノレーン大使にお伺いしました。



スウェーデン大使館 ステファン・ノレーン大使

国の政策や学校・家庭の教育が環境意識の高さを育む

北海道洞爺湖サミットが開催されるなど、二〇〇八年は日本において環境問題が大きく取り上げられる年となりました。そんな中、環境分野で世界をリードするスウェーデンへの注目もますます高まっています。同国では現在どのような環境・エネルギー対策が進められているのか、スウェーデン大使館 ステファン・ノレーン大使に伺いました。

「環境保護活動の第二歩として、私たちは社会のあらゆる階層、あらゆる領域で、行動を根本的に変えることを目指してきました。例えば政策面では、早くからオゾン層を破壊する物質の使用を禁止し、土地や森林の酸性化を食い止めることに成功しました。また、一九七〇年代の石油危機以後は、再生可能なエネルギー技術に莫大な投資を行い、現在では国内のエネルギー供給の約三分の一が、水力発電や風力発電など再生可能なエネルギーに基づくものとなっています。ほかにも一酸化炭素税・エネルギー税の導入や、環境にやさしい製品に示される『環境ラベル』の普及なども、かなりの成功を収めています」。

政治的、経済的、技術的に数々の手段を講じ、エコ先進国となったスウェーデン。当然、こうした取り組みを進めるうえで、国民の理解と協力は不可欠です。では、スウェーデン国民の環境への関心の高さはどこからきているのでしょうか。

「スウェーデンは国土が広く、人口密度の低い国。人々の多くは、森や湖、大地といった自然と共に生きています。ですから湖の汚染や森林の減少が、自分たちの暮らしに直結するという自覚が高いのです。そうした伝統に加え、国としても、国民が環境への意識を高めることを政策に盛り込んでいます。また、企業も環境対策には積極的。製品がEUの環境基準や国際的合意に基づいたものかをチェックするために、多くの企業は環境の専門家を雇っています。スウェーデンでは環境問題に取り組むことが、そのまま企業の利益に直結するという考え方があります」。

大使はさらに、家庭や学校での教育も、環境意識の向上に大きな役割を果たしていると話します。

「スウェーデンでは、ダイケアセンターと呼ばれる託児所から環境教育をスタートさせます。豊かな自然環境を活かしたアウトドア環境教育も盛んです。もちろん各家庭でも、ごみの分別などを子どもにしっかりと教え込みます。ですから本国では、年輩の方よりもむしろ若い人の方が環境意識が高い傾向にあります」。

「アウトドア環境教育セミナー」は環境への意識を高める第一歩

様々な点で学ぶところの多いスウェーデンの環境対策ですが、大使は「日本国民は、日本の政治家や企業のトップが考えているよりもずっと環境への意識が高

い」と指摘します。

「日本には、古来から神道の考えに基づいた自然への配慮があると感じます。ヨーロッパから日本を訪れた人は皆、大気や水、街なかがクリーンであることに感心するのではないのでしょうか。また、東京都では昨年、気候変動対策として「カーボンマイナス東京10年プロジェクト」がスタートしました。これ、役所」の主導ではなく、市民からの支持を得て実現した取り組みと言ってもよいでしょう。ここからも、日本人の環境意識の高さが伺えます。こうしたことにより私は、日本の環境の行く末に対しては楽観的な見方を持っています」。

さらに、東海大学札幌キャンパスで9月に開催する「アウトドア環境教育セミナー」(詳細は次ページ)について触れ、「北海道はスウェーデンと同じように、自然が豊かで人口密度の低い土地。それだけに自然環境への関心も高く、日本で環境対策を推進していくのにおさわしい地域の二つだと思います。洞爺湖で環境サミットが開催されたのも、そうした要因があつてのことでしょう。9月のセミナーには私も出席する予定です。が、こうした取り組みを機に、日本とスウェーデンが協力して環境問題の解決に向けてパートナーシップを組むこと

ができればとても嬉しいことです」と話して下さいました。

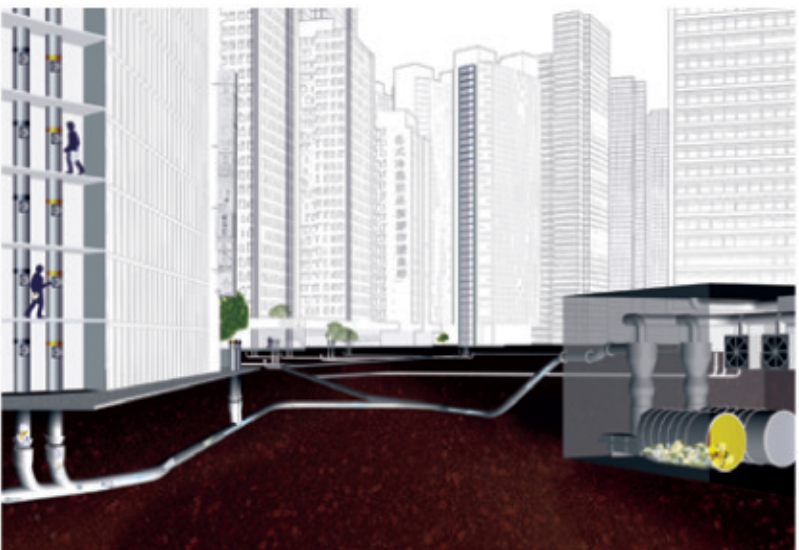
語学教育の面から東海大学に期待すること

ステファン・ノレーン大使は東海大学に対して、環境教育のみならず、語学教育の面でも高い関心を寄せています。「大使館では、より多くの日本の方にスウェーデン語を学んでいただくために、様々な取り組みを行っています。例えば「スウェーデン語デイズ」。これは大使館に本国から語学教師を招き、スウェーデン語を学びたい方や興味のある方を招待して交流を持つイベントです。また、スウェーデンへの留学を希望する学生へのスカラシップ(奨学金)も設け、対象者の選定も大使館が行っています。一方、東海大学は日本でスウェーデン語を学ぶことができる数少ない大学のひとつ。カリキュラムにスウェーデン語を取り入れてくれたのはとても嬉しいことです。ですから大使館としても、東海大学におけるスウェーデン語教育を積極的にバックアップしていきたいと考えています」。

実際、昨年6月には大使自らが札幌キャンパスの学園祭を訪れ、スウェーデン語を学ぶ学生や地域の住民とのセッションに参加しました。「札幌で東海大学の学生たちに会って感じたのは、彼らがスウェーデンのことを非常によく知っているということ。ディスカッションでは本国に関する様々な知識が披露されました」。

このセッションを通して、スウェーデン語を学ぶ学生がスウェーデンにとって大切な存在であることを改めて実感したという大使。彼らにはぜひ、実際にスウェーデンを訪れて、より理解を深めて欲しいと話します。

「スウェーデンではほとんどの方が英語を話すことができますが、スウェーデンのコミュニティの一部として機能するためには、やはり英語とスウェーデン語の両方が必要になります。つまり現地の人々とより深いコミュニケーションを取り、スウェーデン



スウェーデン・Envvac社のゴミ回収システム「廃棄物収集の定置装置」。100から10,000戸のアパートの住宅団地に設置されている

という国の本質を理解するためには、スウェーデン語を話す能力が欠かせないのです。そして日本とスウェーデンの双方を知る人材は、両国のより良い関係を築くために不可欠。東海大学の学生には、ぜひそのような存在になって欲しいと思います。また東海大学に対しては、今後もスウェーデンへのシンパシーを持ち続けてほしいと期待しています」。

※記事中の内容は取材時点(8月8日)のもです。